

「東日本・家族応援プロジェクト2019 in むつ」を開催しました

人間科学研究科教授 村本邦子

9年目となる「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」は、むつ市、むつ市連合PTA、下北地域県民局地域健康福祉部（青森県むつ児童相談所）との共催、青森県教育委員会・むつ市教育委員会・むつ青年会議所・下北里親会の後援を頂き、8月9日（金）～9月1日（日）団士郎家族漫画展をむつ市立図書館、8月30日（金）支援者支援セミナーをむつ市役所、お父さん応援セミナーをむつ市中央公民館、8月31日（土）漫画トークをむつ市立図書館にて開催しました。いつもながら皆さんに暖かく迎え入れて頂き、今年もまたむつ市長が顔をのぞかせてくれました。

支援者支援セミナーは、昨年、「人数が多すぎて見えにくかった、聞こえにくかった」との声があったため、人数を60名に限定したものの、当日の飛び入り参加者も結構あって、嬉しい悲鳴をあげました。いつものように地元の事例を出して頂き、グループに分かれて検討しました。繰り返される転居、障害を抱えてシングルでの子育て、支援の拒否、DVなどさまざまな今日的課題が含まれており、院生たちとともに私たちが学ばせて頂きました。アンケートでは、「今回のセミナーで、多角的な見方、考え方を再認識しました。地方のよさがわずらわしさにつながる。子どもの安全・安心を第一に考えると、周囲の大人の心を傷つける。常に両面を意識していけないといけないと実感しました。そのためにも様々な機関がつながり、役割分担をしていくことこそが家族みんなの幸せを拓いていくと思いました。ありがとうございました。」（61歳、2回目、女性、下北教育事務所）、「事例を通してどうしても問題点を中心に考えてしまう事があります。できることや強みを見つけ、今後の支援に繋げていければと思います。」（44歳、1回目、男性、障がい就業生活支援センターしもきた）などの声を頂きました。

夜の部のお父さん応援セミナーは男性オンリーのため、女性たちは夜のフィールドワークとして、初めての来さまい館を案内してもらいました。

二日目は漫画トーク。「毎回参加する時に思うことは、その時に自分の中にある迷いや気にかかっていることに対して参加することで確認ができているなあと思うことです。今回も回復と成長することのきっかけや、どう考えてその行動を起こすかということを考えていました。」（50代、女性、5回以上）、「周りの人と意見交換もできて、楽しかったです。色々な視点から物事を考えられるようになりたいです。」

（20代、女性、はじめて）などの声を頂いています。漫画展の方にも、「なんとなく見たのですが、引き込まれました。家族漫画ということで、昔風の道德っぽいステレオタイプの内容かと思いきや、考えさせられる素敵なものが多く、おもしろかった

です。冊子もいただいて帰ります。ありがとうございました。」（50代、女性、はじめて）、「先生の漫画を見るたびに温かく、せつなく、懐かしい思いになります。このプロジェクトの精神が、見た者たちと、それを聞き伝えられた人に永遠に活かされることを心から願っています。また来年も来ます。きっと！」（60代、女性、5回目）のように、初めて出会う方からリピーターと、多くの方に喜んで頂けているようです。

プロジェクトも残すところあと1年となりました。反省会では、十年後以降、地域を中心に継続していけそうなことなど、さまざまな知恵も出しました。何らかの形で、巻いてきた種が芽生え、地域に育っていくことを願っています。



スタッフ集合写真



むつ市長と一緒に

2019プロジェクト in むつ

団 士郎

2019年、プロジェクトがスタートした。

大詰めの9年目。10年の区切りの後、どうしていくかが話題になる。

ずっと携わってきた青森県職員の杉浦さんも定年退職を迎え、再任用で実質的には中心的に動いてくれているが、従来とは立場が変化して関わってくれていることになる。10年も経てば様々なことが変化するのは当然で、これからのことを考えるのは、これからの人でいいのだ。

このギャラリーでの漫画展がすべての始まりになって、多くの場所で開催できるようになったのは漫画家としての私には大変化だ。

2011年9月19日のツイッターに私はこう書いた。

「むつ児相のSさんから電話。慣れない展示作業を日曜日にみんなでしてくださったことに感謝。パネルは八話送ったのだが。展示スペースの関係で二十九枚、七作品の展示にな

った。人生初の個展だからワクワクする。今後どんな展開があるのか、ないのか、楽しみ。」

そして10年も経たないうちに、中国・蘇州、上海、台湾・台北、ニューヨーク、そして東北四県を皮切りに、国内各地でも個展が開催できることになった。

会場に置かれた感想ノートには、毎年、いろんな思いが綴られている。

今年の「漫画トーク」は小冊子掲載の一話「ため息と一言」と展示作品「循環バス」を題材に、こころ問題を話題にした。こころは癒やされ、守られるもの、そして一方、鍛えられるもの。この観点から、こころを鍛える人、鍛え手に誰がなれるだろうかを考えてみた。見守られ、癒やされるばかりでは、健全な個は育たない。そこを育てることが真の支援だろうと結んだ。

四人の参加院生でコンパクトに運んだが、プログラム参加者の様々に触れて、対人援助領域に従事することになるかもしれない者の経験として、なかなか含み多いものだったのではないかと思った。





2019 年度の下北でのとりくみ

中村正（立命館大学人間科学研究科教授）

今年も例年と同様に、「支援者支援セミナー」と「お父さん応援セミナー」を担当した。

「お父さん応援セミナー」は初めての参加者も多かった。年齢も 20 代の方から 50 代まで広がっていた。そのなかでこんな感想を寄せてくださった方がいた。

「罰ではどうしようもならないという事が、様々な場面で活かせると思いました。今まで、こんな感覚を持つセミナーに参加したことはありません。来てよかったです（50 代、はじめて参加）」と記していただいた。

マンネリにならないように今回工夫したところの一つがこの点だったのでドンピシャの応答なので、嬉しく思った。家族システムにおける父親の役割を話した箇所、とかく躰をしたがる父の立ち位置のもつ危うさを話したところに関連している指摘である。私が大阪で取り組む男親塾という虐待した父親のグループワークでの会話を次のように紹介した。

虐待して親子分離された父親が語った。「小学 3 年の子どもが嘘をつくようになってきた。嘘をつくことは悪いことである。叩いて矯正しようとした。」と。これに対してグループワークの場で他の虐待する父親たちに聞いた。「こうした厳しいルールが家の中にあると子どもはどんな行動をするでしょうか。」と。同じように暴力でしつけられた父親たちが多いので、一様に同じ答えだった。「僕は嘘をついていないという嘘をついて生きてきた。」と。

この父親の罰でしつけようとする営みは嘘をつく子どもを育てているということにしかない。子どもの嘘は教育のよい契機となる。罰ではなく罪の意識の形成とともに自ら改善する方へといかに子どもを教導していけるのか、暴力を用いるとどんな結果になるのか等が加害者更生の対話をとおしてクリアになり、罰として暴力を用いることの負の結果を理解する。

さらにこうした厳しいルールや罰を中心とした指導だと、彼は暴力をふるいつづけなければならなくなる。つまり、厳しいルールは違反しやすくなり、違反があればしつけのための暴力を振るうことで対応することになるのだから悪無限に陥る。嘘をつくことを強化し、暴力を振るうことを強化するようなルールは不必要である。

同じ事は体罰で処分された教師との対話からもいえる。部活指導で強くするためにということで体罰を用いた指導をしていたが、そのクラブはそうした雰囲気の中かで部員が辞めていき、部活動自体が成り立たなくなった。そしてなにより体罰のある部活動ではやる気がおち、スポーツで勝てなくなっていった。体罰を受けても選手となったことを誇りにさえ思っている、強く鍛えるためには体罰を行使しつづけるしかないと思いつつその教師の教育観の根本を立て直す対話をするようになった。暴力の再生産でしかないそのやり方の修正と、ではどうすればいいのかについての問題解決のための対話となったことがある。

罰だけでは子どもは育たないどころか別の効果を持ってしまう。罰の最たるものは虐待である。虐待を受けた子どもは長じて困難を抱える。虐待をする。男親塾に来る父親のすべては虐待をされていた。嘘をつくからといって暴力という罰でもって「解決」しようとしたその父も虐待だとして男親塾に来る羽目に陥った。悪循環である。

こうしたことを下北のセミナーで紹介した。罰では人は育たないという話を真剣に受けとめてくれたことを嬉しく思った。社会の中なかでも活かせるということも話をした。来年はとうとうフィナーレの10年目だ。何をしようかといまから考え始めた。

支援者支援セミナー





「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2019」に参加して

対人援助学領域 M1 神山尚美

むつでの3日間は、目まぐるしくあっという間だった。京都から新幹線を乗り継ぎ約7時間の長旅であったが、現地で指揮をとられていた杉浦さんをはじめ、児童相談所の職員の方々、図書館の職員の方々、PTAの会長など、様々な方々に温かく迎え入れて頂き、最初は不安で少し緊張していたが、地元の人々の温かさや親しみやすさに触れ、私達院生を受け入れてくれている懐の深さ、安心感を感じた。

支援者支援セミナーでは6-7人前後のグループになり、ジェノグラムを書いて情報を整理しながら、グループ毎に事例検討を行った。院生が受付や参加される方の誘導・名札の説明などを行ったが、何度も参加されている方も多かったのか、こちらが説明するまでもなく名札を作っていたり、先に来られていた方が、同じテーブルの参加者に名札などの説明をしている姿がちらほらあり、全体的に親切で温かい印象を受けた。

また、参加している姿勢も、メモを取りながら熱心に話を聞かれている人が多かった。私が参加したグループのメンバーは、民生委員、児童相談所の職員、母子会の方、乳児院の職員、保育園の園長などで、年齢も20代から80代と幅広い構成となっていた。気になる点や意見も様々な立場から活発に話し合いが行われていた。問題をひたすら探すリスクアプローチ的な視点からではなく、良い部分を見つけて伸ばす方向にもたくさんの意見が出ていた。一つの事例検討の中でも、保育士さんは保育との連携の話など具体的な実情を踏まえて意見されていたり、民生委員の方は、民生委員として実際に入れる部分はなかなか難しいことや、自分の孫のことなど自身の背景と照らし合わせて意見を言われていたり、様々な背景を持つ人達が話しあうことで、違った視点からの意見が出てとても勉強になった。

支援者支援セミナー終了後、図書館にて休憩を取ったが、図書館は海に面した立地で、ガラス張りの図書館のロビーは絶景だった。移動途中の会話では、「海に面した学校で、窓をじっと眺めていると船酔いのようなになる」などの話を聞いた。その後、夜のフィールドワークで、斗南藩上陸の地やむつ来さまい館などに連れて行っていただいた。むつ来さまい館では地元の山車などが展示されていた。また、エネルギープラザの一角は、原子力は身近なものであり、安全性が高いこと、事故を踏まえて様々な安全への取り組みをされていることが強調されていた。また道中では名産品であるヒバの木片を頂き、ヒバの良い香りに癒された。

漫画トークでは、感想ノートに「今年も楽しみにしていました。」など何度も来られている人からのあたたかい言葉が綴られていた。ゆっくり鑑賞している人、近くの人と「こん

なことあるよね」と楽しそうに話す人など様々だった。最後の反省会では、派手にやらず細く長くやっていきましょうという趣旨の話をされており、漫画展という装置として、一つのことを長く続けていくこと、繋がっていくことが大事なのだと感じた。

フィールドワークでは、恐山や東通村近辺の散策、六ヶ所村原燃 PR センターに行った。恐山は硫黄の香りが辺りにたちこめており、お地蔵さんや風車、岩のごつごつした感じが地獄のようでもあり、4色位に変色して見える宇曽利湖は不思議な美しさがあった。不思議な空間はまさに「あの世」のように感じた。霊山と言われるのも納得できた。たまたま、潮来の口寄せもやっており、人気があるようで並んでいる人が何人かいた。

東通村の市役所や小学校あたりを散策したが、広大な自然の中に突如、近未来的な建物があり不思議な風景だった。六ヶ所村原燃 PR センターでは、エネルギープラザで展示されていたものと同じように、原子力の安全性や身近なものであることを PR した展示がたくさんあり、小さい子でも遊びながら理解でき、親しみを持てるようなゲーム形式の展示やキャラクターなどがあった。

また、ホテル滞在中は、近隣でクマが出たとの放送が聞こえてきたり、朝のカラスの鳴き声が、私の気のせいかもしれないが、関西とは違う聞きなれない鳴き方だなと感じた。カラスにも方言があるのかもしれないなどと考えたり、自然豊かなむつを味わった。

今回、プロジェクトに参加させていただき、温かく迎え入れて頂いた。現在9年目まで続く繋がりの中で、積み重ねられてきたもの、関係者の方々が作り上げてきた関係性や「場」の力が、その温かさを作っているのだなと感じた。現地で指揮をてきぱきと取られていた杉浦さんはじめ、児童相談所のスタッフの方々、図書館の方々に温かく迎え入れて頂き、むつの人の温かさや懐の深さ、繋がりの方々の強さを感じた。このような地元の人々の力が繋がり、年数を重ねて「土地の力」となるのだなと感じた。来年で10年目を迎えるこのプロジェクトに参加させていただき、一つのことを細く長く続けていくことの大切さ、繋がりの方々の大切さなどを考える機会となった。この大きな繋がりの中に少しでも参加できたことに感謝し、これから対人援助職者として、一人の人間として学びを深めていきたいと思う。

「東日本家族応援プロジェクト in にむつ」に参加して

立命館大学人間科学研究科 対人援助学領域 M1 川口拓馬

本州最北端である下北半島までは大阪から約8時間かかり、気候は涼しく自然に囲まれた土地であった。プロジェクト中はリスしか見かけることがなかったが、現地の方の話ではクマやカモシカなどが近くで見られるそうで、東北に来るのが初めてであった自身にとっては刺激的な土地であった。到着するとむつの方々と交流を行い、むつについての話を

伺った。

むつでの活動は、「支援者支援セミナー」「お父さん応援セミナー」「団士郎の漫画トーク」「フィールドワーク」を主に行った。支援者支援セミナーでは、児童相談所、民生委員、里親、教員など多職種の方が集まり行われた。当日は多くの人が集まり、白熱したディスカッションが行われた。そこで感じたのは今年で9年目になるプロジェクトであるということと、普段から他職種の連携が図られているということからスムーズに議論が展開されていることであった。どこのグループも議論が活発であり、むつでの対人援助の熱を感じた。

お父さん応援セミナーでは、女人禁制であったため大学院生はひとりでの参加であった。30人近い人数のお父さんやお父さん予備軍の方が参加し、男についての話があったり、男について語り合った。普段は話せない男の辛さを共有することで、意外と同じことを考えている人が多いことに気づいたり、話すことですっきりするなどが見られた。自身も年上の男性と男について語り合うという場は今までなかったためとても新鮮な体験となった。全体として最後に感想を聞くと「こういう場面でしか話せないこともあった」「男が弱音を吐く場があれば」「同じ悩みがあるんだな～」「家庭内のちょっとした気づきの一言が大事」「会話の難しさ楽しさを感じた」「普段レポートトークをしがちだった」などの話があり、男だけで話すからこそでてくるものがあると感じた。

団士郎の漫画トークはむつ市の図書館で行われた。図書館に漫画が展示され、多くの方が訪れていた。そこには感想を書く紙も置かれており、図書館を訪れた方がいろいろな感じた事、思いを書かれていた。漫画トークでは、団先生が講演され、テーマは「心を支える、心を鍛える」であった。心を支えるというテーマでは、逃げていいと知ることが大事で逃げましょうということとは違う、人は人の人生をジャッジできないので最終的には自分で決めないといけない、そこで逃げてもいいと知ってもらうことが必要と話されていた。心を鍛えるというテーマでは、成長を目指した心の鍛えが必要であるという話であった。多くの方が足を運びそれぞれ何かを感じている姿を見たり、残された感想の紙を見ることでこのプロジェクトの意義を感じる事ができた。

フィールドワークでは恐山や六ヶ所原燃 PR センターなどを訪れ、また下北の地域を実際に見て回ることによって、それまで話した下北の方々がどのような場所で暮らしているのかを身をもって感じ、このプロジェクトを終えることができた。今年が9年目であるこのプロジェクトも来年で節目の年である。私はその9年目だけに参加したわけであるが、9年間続いてきたという歴史を現地で感じる事ができ、その継続の力の大きさを身をもって体験した。10年目という節目の年に向けて今年もそのバトンを繋げることができたのではないかと感じている。

今回このプロジェクトに関わってくださったすべての方々に心から感謝いたします。ありがとうございました。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2019」に参加して

対人援助学領域 M1 武田悠衣

今年で9回目を迎える東日本・家族応援プロジェクト in むつ。

このプロジェクトに参加しようと思ったのは、自分があまりにも無知であると気づいたからです。このプロジェクトの発端は「東日本大震災」。わたしは当時、幸いにも何も被害がなくテレビの報道や新聞でしか情報を受け取っていませんでした。大学3回生の冬、わたしはゼミの活動で初めて被災地である福島を訪れました。被災者の方のお話を実際に聞いて、メディアを通してでは伝わらない何かを感じました。その時に感じた思いをどうしていいのかわからないまま今まで過ごしてきたのです。

今年で震災から8年目になります。このプロジェクトの存在を知った時、わたしは福島を訪れた時の感覚が蘇りました。そこで初めて、何も知らない自分に違和感を感じているのだと気付きました。以前は、福島だったので、今度行ったことのない場所にしよう。そう思ってむつに行こうと決めました。

京都から新幹線を乗り継いで8時間。本州最北端は想像以上に遠かったです。しかし、疲れ以上のものがむつには待っていました。それは、人の温かさや、つながりを大事にしていることです。今回、身にしみて実感しました。

各セミナーのうち特に、支援者支援セミナーが一番印象的でした。支援者支援セミナーは、むつ市で働いている職員と院生がグループとなって実際に問題となっている事例を検討するものでした。普段の講義のグループワークでは得られないような斬新な意見や、経験則から基づく意見など無知なわたしにとって最高の勉強の場でした。

団先生の漫画トークでは、先生の漫画が好きだから、先生の漫画に助けられた、共感したなど同じ思いを持った人々が集まることにすごさを感じました。漫画が面白いことはもちろんのこと、この漫画で人々がつながっているということに感動しました。将来、心理的支援を仕事にしたいわたしにとって、このような人々の繋がりを間近で体験できてよかったですと感じました。関西と東北の距離を超えて、思いがこのむつに詰まっているのだと思いました。

さらに、むつの魅力は食べ物と人の良さです。食べ物、特に海産物は絶品でした。人の良さというのは、温かく私たちを迎えてくださったこと、私たちに興味を示して優しく話しかけてくれたことなど数え切れません。地元愛に溢れる方が多く、何も知らない私たちにむつの魅力について少ない時間ながらにたくさん教えてくれました。もう一度行きた

い！そう思える場所と人々でした。

今回このプロジェクトに参加して、無知な自分という違和感は少し解消されたと思えます。まだまだ知らないことは多いですが、やはり実際に行って感じ取ることがいちばんの勉強でありこれからの行き方に役立ってくれると感じました。百聞は一見にしかず、経験は財産なり、という言葉がまさしくふさわしいと思わせてもらえる4日間でした。先生や院生をはじめ、むつの皆さん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

「東日本・家族応援プロジェクト in むつ」に参加して

対人援助学領域 M1 高橋穂波

青森県むつ市、当初の私にはどのようなところかほとんど想像がつかなかった。出身が四国で本州に暮らし始めて5年目の私にとって、本州の最北端であるむつ市は名前しか知らない場所であった。そもそも23年間の人生で東北に行ったこともなければ、国内では長野県より北に行ったことがなかった。だからこそ本州最北端の市であるむつ市がどんなところか、興味を駆り立てられたのである。

事前学習でむつ市についての基本的な情報を学んでいくにつれ、非常に魅力的な場所であるということが分かっていった。豊かな自然に東北独自の文化、そして震災や原発……「早くむつに行きたい」と私は強く思うようになった。

そしてプログラム1日目、関西から新幹線と在来線を乗り継ぐこと約7時間、ようやくむつ市に到着した。下北駅に降り立った瞬間、冷涼な風に包まれ「本当にすごく遠いところまで来たんだ…」と改めて実感した。1日目の夜は本プロジェクトに関わって下さっている職員の方たち等との懇親会があったが、一学生に過ぎない私たちを大いに歓迎して下さい、ここでまずむつの人々の温かさを感じた。

2日目は支援者支援セミナーに多くの方々が参加して下さい、様々な意見を出し合いながら事例検討が進められていった。今までも授業で事例検討はしていたが、今回取り扱った事例は今までで一番難しいものであると感じた。しかし、私と同じグループの方々は、自分もつ専門的な視点や今まで積み上げてきた経験から多様な意見を出されていた。そして先生方も仰っていたが、むつの人々は良い意味で「おっせかい」である。皆が事例の当事者たちを心から心配し、どうにかしたいという気持ちが私には強く伝わった。ある程度コンパクトな街であり、各機関の連携が取りやすく、そしてむつの人々もつ温かさがあるからこそ「おせっかい」がしやすいのであろうし、都会にはあまりないむつの素晴らしいところだと思った。

3日目の団士郎先生の漫画トーク展では多くの方が来場して下さい、およそ1時間半に及ぶ講演を熱心に聞いていらっしやう。また、漫画展での感想ノートには、来てくださ

った方々の様々な思いが書かれており、ポジティブな感想が多く見受けられた。そういった感想を読むにつれ、私の心も温かくなっていくような気がした。

本プロジェクトは今年で9年目を迎えた。来年が10年目であり、節目の年である。今回のむつでの体験を通して、東日本・家族応援プロジェクトを10年目で終わらせるのは非常にもったいないように感じた。今まで築き上げてきたむつの方々との関係性、プロジェクトの内容等を顧みても、本プロジェクトが10回目を迎えた後もそこで終わるのではなく、何らかの形で発展させることができれば非常に望ましいことであろう。

今回のプロジェクトに携わってくださったむつの方々に深く感謝の念を抱いております。むつで得た経験を今後様々なことに生かしていけるように頑張りたいと思います。本当にありがとうございました。

交流会の様子



